

小学校の通常学級における障がい児の介助実習を通して

黒 住 早紀子 (心理学分野)

実習の動機

私は、学部生の頃から、何人かの障がい児と関わりを持ってきた。その関わりは、養護学校や障がい児の通所施設、相談所でのものであり、私とその子の二者関係のものである。その関わりを続けていく中で、「この子たちは、同年代の子どもとはどのような関係を築いているのだろう」と関心を持った。実際子どもたちの発達においては、いろいろな他者との関わりが欠かせないものであり、特に学童期においては同級生もしくは近い年齢の子との関係が重要になってくるだろう。

最近、話題になることが多い、広汎性発達障がいの子どもたちは、関係性の障がいといわれ、友だちをつくるのが苦手だったり、関心がなかったりすることを指摘される。しかし、これまでのこうした子どもたちと出会った経験から、彼らは決して、人を完全に求めているというものではないことが伺えた。広汎性発達障がいといわれる子どもたちにとっても、毎日の時間の大半を過ごす生活の場である小学校におけるクラスメイトや先生の存在は、彼らに何らかの影響を与えていると思われる。特別支援教育も始まることもあり、普通級に所属する広汎性発達障がい児たちが、学校内でどのようにしてクラスメイトや先生などの周囲の人たちと関係を形成し、学校生活を送っているのか、ということをもっと深く知りたいと思った。

将来、臨床発達心理士の資格取得を希望している私は、臨床発達心理実習において、小学校通常級で過ごす広汎性発達障がいの子どもの生活や学習の介助実習を体験することになった。ここでは、この体験を通して、この子とクラスメイトとの関係づくりについて気づいたことをまとめたい。

実習の概要

実習先の小学校は、都内の閑静な住宅街にある。オープンスペースの教室が特徴の学校であり、広いピロティを活用して、学年合同の授業等も行っている。また、算数の授業は習熟度別の少人数指導を行っており、指導法に工夫をしている。

実習内容としては、主にそのクラスに属する障がいのある子どもたち2名（2年生女兒、3年生男児）の介助である。授業中、彼らの様子を見ながらその子の必要に応じて、もしくは担任からの要望に応じて授業中の介助を行う。

実習期間は2004年9月下旬からで、現在も継続中である。実習時間は、毎週月曜日8:30～3:00までで、8:30～11:30までは2年生のクラスへ、11:50～3:00までは3年生のクラスで実習を行った。これまでに計17回で計110.5時間である。

ここでは、3年生のクラスの広汎性発達障がいと見なされている男児のクラスメイトとの関係作りに焦点をあてる。

Aくんは、一年の時からこの小学校通常学級に在学している。性格は穏やかで、現在は折り紙に凝っているが大変器用にいろいろなものを折る。自発語は限られているが理解はしっかりしており、特に補助しなくても、自分で指示を聞き、行動に移すこともできる。授業については、皆と一緒に参加しているが、同じ授業内容についていくことは難しい時もあるので、場を共にしながら、関連内容をできる範囲で取り組むようにしている。

2004年4月からは、学校内の事務員が介助員として決まった時間に教室に入っていた。10月からは新たに介助員を増やし、曜日によって、私以外にも2人の介助員が教室に入っている。

実習体験から学んだこと

A くんに関わる中で最も驚かされたのは、周囲の子どもたちの A くんに対する観察力の豊かさと柔軟さである。私は、はじめのころ、まだ彼が見せる行動から彼の思いを理解することがむずかしく、困惑することもあったが、2 年半近く生活をしているクラスメイトたちは、即座に理解し、それを私に翻訳してくれることがあった。例えば、ある日の給食のとき、A くんの手箸はどうしても進まないが、私は訳がわからず、ただ A くんの様子を見ていたところ、同じ班の子が「A くんはね、混ぜご飯とかぐちゃぐちゃってなってるのが嫌いな。」と私に説明し、「A くん、にんじんだけ食べな」と A くに声をかけた。すると、それまで全く手をつけようとしなかった A くんは急に、箸を持ち、小さく切られたにんじんを探して食べ始めたのである。時間にすれば一瞬の出来事であったが、この一言は普段 A くんの様子を知っているからこそ出てきたもので、とても暖かく感じられた。

こうしたクラスメイトは、ただ長い時間を一緒に過ごしていることで、A くんを理解できるようになったのだろうか。よく見ていると、クラスメイトはときどき A くんのこだわりや独特な行動や姿勢をまねしていることがある。大人たちは、“失礼なこと”と判断してしまうかも知れないが、彼らは、A くんと同じ姿勢をとることで、A くんの世界を理解しようとしているようにみえた。しかし、こうしたクラスメイトの動きは、決して、“特別”とか“一生懸命”というのではなかった。日常生活の中で、“さりげなく”、“自然に”見られたのだ。常に、A くんに対して関心を向けているわけではなく、そうはいっても、無視したり、排斥しようとしたりするわけでもなかった。1 年生から生活しているせいなのか、彼らにとっては A くんの存在は“当たり前”のことになっているのだろうという気がした。

毎回、私は、A 君の保護者と情報交換をする時間をとることができた。これまで出会ったこうした障がいのある子どもの保護者達は、「他の子どもの邪魔になったり迷惑を掛けてしまうのではないか」ということをひどく不安に感じていることが多かった。また、学校に対しても「申し訳ない」という想いを抱いてしまう人も少なくない。A くんの母親も、入学当初は、「申し訳ない」という気持ちをクラスメイトにも学校にも持っていて、少しでも迷惑をかけないようにという気持ちもあり、長時間、自分が子どもについていたという。しかし、自分がいることで、子どもとクラスメイト

トの関係づくりを邪魔している部分もあるかもしれないと考えることがあり、少し離れてみようかと決心がついたそうだ。結果的には、母親がいなくなると、クラスメイトは主体的に母親が行っていたような役割を自分たちで補い、また、自分たちで A くんの感情や行動を理解するために、彼とのつきあい方を工夫するようになっていったようだ。

保護者とコミュニケーションをとることは、学校とは違う場面での A くんの様子もうかがえて、子どもを多面的に理解する上で大変役に立った。そういった意味でも、保護者との連絡を密に取ることは、子どもの支援を考える上での連携として欠かせないと実感した。

担任の先生と情報交換することも大変重要であった。実習が始まって間もないうちは、子どものこともまだよく把握できず、担任の先生との関係もできていないが故に、自分に何が求められているのか分からず困惑の連続であった。スーパーバイザーに相談し、担任の先生と話をすることを心掛けたところ、先生が介助員である自分に何を求めているかがだんだんとわかるようになってきた。「学校での支援は担任の支援なしには考えられない」というスーパーバイザーの言葉を、身をもって体験したように思う。

実習においては、テキストでは学べない貴重な体験をし、知識の乏しさ、至らなさ、不全感、未熟さを痛感した。実際の現場で入ることにより、学校はさまざまな人間の関係で動いていることを感じた。対象となる子どもとの関係だけでなく、保護者、担任を初めとした先生方全て人が学校を作り、動かしているという印象を受けた。

個人スーパービジョンから学んだこと

スーパービジョンの中で、「あなたはと思う?」「なぜそう思うの?」「あなたはその時にどう感じたの?」という問いをスーパーバイザーからよく受けた。その問いを受けて初めて、自分は直感で動く傾向があることに気が付いた。+/-、yes/no どちらかといえどこちら、といったように、漠然とは感じるのだが、それを適当な言葉にして説明することができない。自分の感じたことには素直でいようと心がけてきたが、感じたことはそれ止まりで深く考えてこなかったように思った。スーパーバイザーにそう問われることで、確かなになぜ私はそう考えるのだろうか、なぜこう感じたのか、と自分と向き合うことを学んだ。現場でも、ふと何かを感じた時や行動しようとしたときに、に、自

分自身に「なぜそう感じるのか?」「なぜそうしなきゃと思うのか?」と問うことで、ありのままの感情を吐き出して終わりにしてしまうのではなく、冷静に体験を見るように気をつけるようになった。冷静に見るようになって、まだまだ至らないが、スーパービジョンで自分の直感的な傾向に気づき、自分と向かい合う必要性を感じたのは、これから支援者となる上の訓練を積んでいく上で非常に大きなものだったように思う。

授業介助の仕方を考えるにあたっては、「“子どもと私”という自分たちの関係を手がかりに策をかんがえていく」、というアドバイスを頂いた。私は、家庭教師として子どもに勉強を教えてきた経験があったので、家庭教師としてマンツーマンで子どもに教える場合と、学校で授業に沿いながら補う役として教える場合との自分のあり方の違いにひどく戸惑いを感じていた。そういう時にこのアドバイスをいただいたことで、私と子どもとの関係を頼りにしつつ、自分が感じ考えた介

助の仕方を、担任の先生とも相談して一緒に具体的に考えていけるようになった。思い返してみれば自分の感覚に自信が全くなかったのだと思う。このアドバイスによって「あなたの感覚を大事にしてください」と背中を押された気がした。また、実習生、専門家の卵として現場入ることの意味、またその責任についても考えさせられた。今までにボランティアは多く経験してきたが、そこにおいては責任など考えることがなかった。無責任にしてきたつもりは全くなく、人間同士の関係として大切に子どもたちと関わってきたが、その場を楽しく過ごして終わってきっていたことに気がついた。ボランティアに求められるものと専門家に求められるものは違うであろうし、そうなればその在り方も変わってくる。これから専門性をもった支援者となろうとしている自分はどのような視点を持って現場に臨む必要があるだろうか、とずっと自分に向き合いながら考えていきたい。

(2005. 3. 受稿)